

8 家 庭 科

宮 本 真由美

1. 家庭科と自立

家庭科は自立を援助する教科ともいえる。一人の生活者として自立して生きる人間を育てることは家庭科教育の目的である。

家庭科教育は究極的に、一人一人の子どもがよりよい生活をめざす実践的な態度を育てることである。それぞれの子どもがその持ち味を発揮し、進んで家庭生活の課題に関わり、課題を解決するために考えたり、工夫したり、試みたりする子どもの主体的な学習活動が効果的である。それは、ふだん何気なく過ごしている生活をしっかり見つめ、そこにあるよさや課題に気づくことからはじまる。「へー知らなかった」「なぜなんだろう」「やってみたい」「どうすればいいのだろう」「誰かに聞いてみよう」「調べてみよう」「自分ならこうする」など自分との関わりで感じ、考えることで出発するのではないだろうか。

現在、社会の変化に伴い、子どもたちの姿にも変化が見られるようになったといわれる。例えば、生活が便利になり、手足を動かして働かなくても十分快適な生活を送ることができるようになったが、そのことで、子どもたちが作業を工夫したり成し遂げた後の充実感や喜びを味わったりする経験が少ない。また、兄弟姉妹や家族数も減り、家事の機械化などで、人とかかわりながら生活することも少なくなっている。そのため、基本的な生活技能や勤労観の体得、人との協調性などについて習得することが難しく、自立が遅くなっているともいわれている。これらの問題のすべてを解決していくことが家庭科の目的ではないが、家庭科が自立に向かう子どもたちの援助となるのなら、その方法を探っていくことは大変意義深いと考える。

2. 自立を育む家庭科の授業

子どもたち一人一人が、より主体的に活動し、自らの力で課題を解決していくためには、めいめいの考えを生かした学習活動の場を保障していかななくてはならない。主体的な学習活動を展開するには、家庭生活への「関心・意欲・態度」はもちろんであるが子ども自身が、それまでの生活経験や学習経験で身につけた知識、技能、その他自分で考えたり試行錯誤したり判断したできるように、すべての活動において「自分なら」という意識を持つことができる活動を設定することが重要である。また、子どもが自分の思いや願いを具体的にあらわし実践しようとするには、技能や表現力が必要であり、それらを支える知識や理解も必要になる。したがって、子どもが受け身的に反復練習によって身につけていく技能ではなく、意欲的に課題に取り組む過程で必要感から考えたり工夫したりすることにより自然に身につけていくことが子どもたちの自立を育む第一歩と考えるのである。

3. 家庭科でめざす子ども像

上記のようなことをふまえて、めざす子ども像を次のように設定した。

- (1) 日常生活を課題をもって見つめ、気づきを持つことができる。
(観察の視点を持っている。)
- (2) めあてを持ち、計画的に実践することができる。
(見通しを持つことができる。)

(3) 課題解決の方法を自分の思いの実現のために自分で選んだり考えたり決めたりすることができる子ども。

(自己決定することができる。)

(4) 家族や友だちなどのかかわりを大切にしながら、自分らしい生活をめざして考え、実践する子ども

(人とかかわりの中で自分のよさを発揮できる。)

(5) 他の考えや作品の優れている点に気づくことができる子ども。

(多様なものの見方、考え方を認めることができる。)

4. 人やものとかかわることを大切に学習とするために

昨年度までは自分で決めることを大切にというテーマで自立をめざしてきた。今年度は、人とかわることを大切にしていけることを加えることでさらに自立へとめざしていく。なぜなら人とかわることによって自分で決めたことや自分の追求をより広く見つめ直し、自分自身をより深くふりかえることができるからである。家庭科においては自分の生活は様々な人やもの（環境）の中で支え合い成り立っていることを理解し、実践していく教科であり、特に「家族」を源として「人とかかわり」を学びとることができる。自分から家庭へ主体的にかかわったり働きかけていくことでその子らしさも発揮できる。できるだけ「かかわる」機会を作り、子どもが自主的に活動できる場面を作りたい。その際、他とかかわりの中で自分をどう生かしていけるのかについて考えていきたい。つまり、課題をどのように設定し、「自分の思いの実現に向けて他とかかわりの中でどうするか」また、友だちの思いやよさに気づき、お互いに学び合い高まり合う場も大切にしていきたい。

5. 自立に向かう子どもたちを育む家庭科の授業の具現化に向けて

(1) 家庭生活、家族に対して「関心」を高める。

家庭生活を支えている人・もの・仕事などに着目し、どのようにかかわり合っているかに気づき、理解できるようにする。

(2) 体験的学習を取り入れる

少なくなっている子どもたちの生活経験を補っていけるよう一人一人が実際に自分の手を動かし、体を使って体験できる場の設定が大切である。これは技術面だけではなく、思考面でも同じことができる。つまり体の様々な感覚を通して、学習の中で試行錯誤を繰り返しながら学習を深めていくことができるといえる。

(3) 自分の生活に生かしたり工夫する。

家族の一員として子どもの願いを生かした課題を設定し、課題解決を通して生活を創意工夫する力を育てる。まずは、自分の生活を見つめる機会をできるだけ多く設け、その中から課題を見つけることができるようにする。そこから自分のめあてを持ち、学習を深め、最終的には、学習したことをまた自分の生活に返して生かしていくことができるようにする。そのためには、子どもたちが実践してみよう、したいと必要感や期待感を持つような題材が選ぶことも大切である

(4) 個の確立と友だちとかかわり

友だちのよさに気づくためには、まず自分をよく知り、自分の考えを持つことが必要である。また、一人一人のよさは、他とかかわることによってはじめてよさとなる。子どもたちが自分のよさに気づき、認め、更に友だちのよさに気づき認め合うことができれば、よりよい生活を創造することができるようになると思われる。

6. 成果と課題

家庭科としてめざす子どもたちの「自立」の姿を「自分から家族とのかかわりをもとうとす姿」としてとらえ、成果と課題を述べていきたい。

〈成果〉

(1) 家族とかかわろうとしていたか。

生活の基盤となっている家族と自分とのかかわりを見つめ、自分にできることをしていこうとする態度は自立に向かう姿ととらえている。今年度は、「弁当」を媒介として、家族と自分のかかわりに焦点を当ててきた。今回は、会話を中心にして学習したことで、栄養的な面も自然に学習できた。会話を取り上げることで、実生活により結びつけることができた。また、ロールプレイを取り入れることにより、自分の思いだけでなく、家族の思いなどに無理なく気づくことができた。更に意欲的に楽しんで活動することができたので効果的だった。

これまでの家庭生活を振り返り、これまで弁当を作ってもらってきたことに対し、反対に弁当を作ってプレゼントするという気持ちを表すこととした。単にバランスのよいおいしい弁当を作るのではなく、家族に支えられてきたことに対する感謝や心を込めて作ることの大切さも学べたように思う。これらのことが基盤となり、人とかかわりを広げていくことができると考えている。

(2) 人とかかわりの中で自分のよさを発揮することができたか。

今年度のサブテーマ「人やものとかかわりを大切に」は、まさに家庭科のめざす子ども像と合致している。家庭科では、人とかかわりに重点を置いて、特に友だちとかかわりを多くもつことができるよう設定した。弁当の問題点に気づくために、班で担当の弁当を決めたり、ペアで会話文を考えたりして、友だちと話し合いながら進めていく場面を多く作った。また、ロールプレイすることも、かかわりを深めるのに効果的な方法だった。実際に家族へ作る弁当は、班で一つの弁当メニューを考え、班で調理するという方法をとった。メンバー全員が納得するメニューを考えることで、自分の思い通りにならないこともあるが、その時に、多くのかかわりあいが生まれてきた。このような経験を積み重ねていくうちに、スムーズによりアイデアが生まれてくるようになってきた。友だちの意見を聞いて、なるほどと思ったり、それがヒントになって新しいメニューが生まれたりする。調理をする際にも、その子らしさを認める発言も多く見られるようになり、失敗をおそれずのびのびと活動できるようになってきた。

〈課題〉

11月の遠足お願い弁当から、2月の弁当調理まで3ヶ月近くかかった。今後、総合学習との関連も見えていく必要がある。また、調理計画や、調理実習では、給食室の先生に協力を願った。その成果もあり、2時間できちんと作り終えることができた。TTの活用の仕方も探っていきたい。

